

南方（ラバウル）

さらば「ラバウル」よ

愛知県 横井正雄

私は横井正雄です。愛知県海部郡立田村において、大正十一（一九二二）年一月五日に生まれました。昭和十七（一九四二）年徴兵検査で第一乙種合格で陸軍歩兵となりました。

昭和十八年四月一日、福井県敦賀市の歩兵第十九連隊へ現役兵として入営しました。

入営当時の我が家の家族といえば、

父 健康 農業 水田一町六反 畑三

反

母 健康 農業

長女 健康 他家へ嫁入り

長男 健康 農業

次女 健康 他家へ嫁入り

三女 健康 他家へ嫁入り

本人・次男 健康 農業

四女 健康 学生

五女 健康 学生

という状態で、経済的にはまあまあのところでした。

私の入営の時のことを振り返って思い出すと、地域の神社へ壮丁（入営する人）五人集合。村長や在郷軍人の会長その他の役職の人の激励の挨拶

を受け、私が代表して謝辞と宣誓を述べました。名鉄の駅のある隣町まで約二キロの道のりを長い行列で「日の丸」を打ち振り歌を大声で唄って、賑やかな歓呼に送られて感激したことを、約六十年経た現在でも良く覚えています。

その日は名古屋市内で一泊して勢揃いし、翌日、敦賀へ出発、入営を致しました。第二中隊第二班へ編入された。今まで生活していた娑婆とは一別し、今日よりは軍隊という新しい社会生活に切り替えた。入隊前に聞いていた非道、陰険、残酷に制裁は一先ず無く、我々新しい初年兵も少しは安堵した様子でした。が、四月一日入営、四月十日の軍旗祭が終わると、それまでの様子は一変して鬼の内務班と化した。ここ敦賀は福井県、我々初年兵は愛知県人。言葉が違う。愛知の我々は継子扱いされて、手荒な仕打ちを繰り返し受けた。こうして軍人精神、何くそ、攻撃精神、内務の規律が確立されていった。一人前の軍人が錬成されて行く。

次に簡略に部隊の動きを示しておく。

〔昭和十八年〕

四月一日 昭和十七年現役兵・歩兵第二百二十

八連隊（沼第八九二四部隊）要員として敦賀
第百十九連隊へ入営する。

四月十日 歩兵第百十九連隊軍旗祭。

四月三十日 昭和十七年現役兵第一期検閲終わる。

七月十五日 現役兵気比松原海岸にて水泳演習、海没に備える。

八月三日 昭和十七年現役兵、軍装検査出征
（六〇〇人）連隊出発、気比神宮参拝、汽車にて米原、大阪、広島を経て下関下車。

門司港より「水戸丸」に乗船・四日朝、出港、佐伯へ・五日、佐伯港より一路征途へ。

台湾沖台風。

八月十三日 パラオ入港、資材を積み込む。

八月二十日 パラオ出港、ラバウルへ僚船共三隻。

八月二十五日 敵機ボーイングB17に爆撃さる。「水戸丸」航行不能となるも修理。

八月二十七日 無事ラバウル入港。ココボより上陸、クーロン地区の第二百二十八部隊に配属さる。

九月十七日 第二期教育終了。クーロンを後に行軍、ガバンガより大発にてブツブツへ。

九月二十三日 独立大隊編成のためまたクーロンへ帰る。

九月二十五日 独立第二百二十八大隊編成。大隊長・小森少佐、中隊長・金森中尉。トラック輸送でケラバットグナイ川付近を宿営地とする。

九月二十七日 坪内元一、マラリアにて戦病死。

十月一日 タビロ陣地の構築始まる。

十月十二日 ラバウル大空襲、黒煙天を覆う。

山のように大量の被服・食料・ドラム缶入りのガソリン類・その他一切全部焼け尽くし

た。

〔昭和十九年〕

一月一日 新年宴会。酒・ビール・馳走沢山あり。

一月十日 タビロへ移動、陣地構築。ケラバットへ第一、第三小隊移動、陣地構築。

二月十三日 トラック島空襲され、ラバウル航空隊引揚。これより制海、制空権なし。連日爆撃さる。

三月十二日 ウナバウへ移動。斉藤正戦死。

三月十九日 富士見台へ移動。糧秣倉庫建設。第二小隊付近爆撃さる。

四月二十四日 第二小隊剛農陣屋、陣地構築。

六月二日 第二小隊先発してタナワへ夜間行軍、陣地構築。陣地鉄条網。

六月三十日 クーロンへ移動。戦車壕作業。空襲はげしく夜間作業。夜間海上銃撃戦あり、非常配備。

七月十七日 ガゼル岬へ移動、陣地構築。戦車壕。

八月五日 第一小隊カタカタイへ先発して設営作業始まる。永住設営。

八月二十日 中隊全員カタカタイへ集結。陣地構築。

食料事情悪化して農場の開墾。サツマイモ、十六ササゲ作る。

食料事情ますます悪く病人続出。

マラリア等の戦病死者多し。

〔昭和二十年〕

一月一日 新年宴会、酒少々あり。

長期戦に備えて陣地構築。農耕作業に連日精励。

特攻訓練のために夜間演習。農場を各地に造営、ササゲ、サツマイモ・陸稲、食糧ますます悪化。マラリア、大腸炎等の病人続出。作業できるもの十数人、ほとんど全員病弱者。

八月十六日 全員中隊経集合、終戦の詔勅。
八月二十三日 濠軍ラバウル進駐。

九月五日 カタイカタイより北山付近へ移動宿営。

ガゼル集団設営始まる。濠軍使役（設営作業）。

十一月初 ガゼル集団に入り捕虜生活。
濠軍三十人程監視衛兵来る。

〔昭和二十一年〕

一月一日 演芸会。

四月二十二日 帰還復員のためガゼルより南崎集団出発。

四月二十五日 濠軍の検査を受け、リバティ型輸送船二隻で日本へ向かう。海上平穩。

五月六日 なつかしの名古屋港入港。

当初、浦賀港へ入る予定のところ、伝染病（？）のため名古屋港へ変更の由。

五月七日 進駐軍から頭から足先までDDTの

消毒薬を真つ白に振りかけられた。

午前上陸。夕刻、名古屋近くの者は帰省。

私は夕刻、復員帰省となり、思えば昭和十八年四月一日、敦賀へ入営以来、二年八カ月ぶりの帰省であった。さらば「ラバウル」よ。なつかしい名古屋よ。

さて、この二年八カ月の間、私個人としての苦労と言えば、「マラリアの恐ろしさ」であったと思う。

「マラリアの恐ろしさ」

マラリアは私も病気になる、熱帯熱、二日熱、三日熱とすべてをやったように思う。

まず、食糧事情の悪化により、栄養不良となり基礎体力の低下で病気への抵抗力が無くなる。病気に罹り易く、治り難い。私の大隊での戦没者四十七人のうち、名誉の戦死者七人、四十人の戦友がマラリアで戦病死された。あのマラリア蚊が憎い。戦友は皆良く困苦欠乏にたえて頑張ったと声

を大にして伝える。

マラリアの怖さ、悲惨さを、次の某軍医の言をかりて紹介しよう。

案内された休養室の患者は、熱帯マラリアのため、脳症状を起こし意識が無く、時々けいれんを起こしては、手足を震わせていた。それ以上に困ったことには、顎が外れていたことだ。

もう昨日からこの状態だと言う。――マラリアはほとんど毎月、周期的に反復する兵が多いので、衛生兵も、あまり重大だとは思わず、その都度キニーネ、プラスモヒン、アテプリン等を与え、時々注射しておくのが通例であつたらしい。この患者は、昨年内地から補充で来たばかりの、ここでは初年兵であつたのだ。

私は顎外しを修復した経験は以前にはあるにはあつたが、あまりしばしばあることではないので熟練工ではなかつた。幾度も整復を試みたのだが遂にできなかつた。

それだけではない。何本かの注射によっても患者は回復しない。もはや、このままここに置くことは良くないと思つた。

「衛生兵、すぐ担送の準備をせよ」

私は中隊長の諒承を得て、直ちに患者を入院させる決心をした。

中 略

その後で同僚の軍医も手伝ってくれ、再び顎をやってみたが外れた顎は整復できない。マラリア毒素が神経をおかし、顎の筋肉が強直したためではないかとも言つていた。

その夜は医務室で看病し、翌朝早くトラック便の都合をつけて第一野戦病院へ入院させた。

数日して見舞に寄ると、顎は元に復し、意識も回復してものを食べられるようになっていて、お互いに喜びあつた。その後次第につのる食糧事情の悪化とマラリア再発のため、遂に彼は栄養失調を起こし、生還できなかつたのは、残念極まることであつた。

○ 私の患つたマラリアは、私の親戚になる軍医さんの温かい配慮のお陰で、投薬、養生、その他に恵まれて大事に至らずにすんだ。故郷の家族の神仏へのお祈りのお陰と遠い内地へ頭を下げて感謝した。

○ また下痢を治すには木炭の粉を服用するのが一番であると自分の経験、戦友の証言でよく分かりました。

○ ここラバウルは赤道直下の酷熱の地、内地では体験できぬ珍しいことが多くある。例えば、

- ① 塩鮭にウジがわく。
- ② 餅にカビがつく。
- ③ 蛇が異常に多い。
- ④ サソリがいる。おそろしい。

次に一風変わったマラリア対策の紹介を。

○ 両足を出し、蚊の付着をみて速やかに手にて叩く。

蚊の死骸を一升瓶に集め一位を競う中隊もあつ

た。

○ 各中隊野菜集めに熱中する。カボチャ、カボチャの芽多し。

○ 塩分不足。尿道が放尿時に激痛があり、尿もチヨロチヨロしか出ない。塩水を飲めばケロリと治る。

○ 甘薯畑に芋虫多発。一夜にして畑が坊主になる。

○ 武士は食わねど高楊子、無理な話である。腹が減っては戦はできぬ。本当の話である。

○ ときに、ジャングルの野鳥、ヘビ、トカゲなどを獲ってタンパク源とする。ヤシの芽の汁を発酵させた「ヤシ酒」が酒好きを悦ばせた。タンパク質確保のため、各人留意すれど不足。栄養失調とマラリアのため全員黒みがかった黄色の顔となる。

○ 医務室で石灰と硫黄粉を入手、ドラム缶にて煮沸調整した（硫黄合剤）。

ドラム缶温泉出現。タムシの治療薬となる。

○ 昭和二十年八月下旬。書類は全部焼却処分せ

よと命令あり。重要書類、個人の手紙、写真等、大きな穴を掘り、各人次々と焼却。チヨンガー（独身者）は父母の、妻帯者は妻や子供の写真、手紙を郵便貯金通牒も、皆灰にした。敗戦である。

何のためにここまで来たのか、只々茫然。

時に陸軍六万五千人、海軍三万四千人。

○ 糧秣は豪州軍に押収されることで、全員タラフク食べよとのこと。喜んだのも束の間、二日後、節食命令が出た。長期間滞在の予定のため。

さて私は昭和二十一年五月、名古屋港に上陸、復員し、昭和二十六年結婚しました。女男女と三児を授かり、孫は七人で、皆元気で暮らしています。

ただもつとも辛いのは昭和六十一年に妻が死亡したことです。今から老境に入り、少しでも薬に

と想っていた矢先のこと。可哀相です。朝夕、冥福を祈ってやることしか、尽くしてやることもありません。

私も数えて見れば既に八十歳を超えました。地区老人クラブの会長として、地区の会員と仲良く楽しく暮せるよう、心掛けています。

また恩欠連（軍人軍属恩給欠格者連盟）の村の支部長を命ぜられて、亡き戦友、物故会員の冥福を祈るばかりです。

日本よ！ われ我が南の果てで死闘を尽くした、あの労苦を時々思い起こして、一等国としてますます繁栄し、世界平和に貢献することを誓うものです。

南方戦線を転戦して

愛知県 伊藤 政一

昭和十五（一九四〇）年、徴兵検査にて「第三

乙種」と判定され、補充兵としての資格となった。私は、伊藤家の三男として生まれ、洋服店を営んでいましたので、他家の洋服店で、洋服の仕立て職人の修業をしておりました。

昭和十二年（十五年ともなると支那事変が拡大され、あちらこちらの予備役の方々、あるいは補充兵の方々にも召集令状が来て、町内を挙げて「祝出征」と書いた旗や幟を立てて、駅まで見送って、門出を祝ったのであったが、その後、戦局も厳しくなり、男子の誰もが出征するのが当然のようになり、前のような華やかな見送り風景はなくなつて、近親の方々による出征祝のみの様相となった。

私は第三乙種の補充兵なので何となく肩身がせまく感じていた。友人達は堂々と甲種合格で現役入営、第一、第二の補充兵となった方々も、令状が来て帝国軍人として出征しているのにと、そんな気持ちでいた時、昭和十六年十月、いよいよ私の所にも召集令状の赤紙が来た。これで私も皆と